

ハンス・ラフエー/ボド・アベル編著

現代科学理論と 経済学・経営学方法論

小島三郎 監訳

税務経理協会

ハンス・ラフエー／ボド・アベル編著

現代科学理論と 経済学・経営学方法論

小 島 三 郎 監 訳

税 務 経 理 協 会

監訳者紹介

こ じま きょう ちゅう
小 島 三 郎

1930年 東京に生まれる
現 職 慶応義塾大学商学部教授
経済学博士、経営学説史専攻
著 書 「ドイツ経験主義経営経済学の研究」有斐閣
1965年
「戦後西ドイツ経営経済学の展開」慶応通信
1968年
「現代経営学総論」税務経理協会 1973年
共 著 「経営管理総論」中央経済社 1965年
編 著 「現代経営学事典」税務経理協会 1978年
共 訳 E・シューパー著「企業と企業経済学」
慶応通信 1969年
現住所 〒247 鎌倉市今泉2-30-11

著者との契約により検印省略

1034-0727-3911

昭和57年11月25日 初 版 発 行

現代科学理論と
経済学・経営学方法論

定 価 2,400円

監 訳 者	小 島 三 郎
発 行 者	大 坪 嘉 春
印 刷 所	税 経 印 刷 株 式 会 社
製 本 所	株 式 会 社 三 森 製 本 所

発 行 所 東 京 都 新 宿 区 株 式 税 務 経 理 協 会
下 落 合 2 丁 目 5 番 13 号 会 社

郵便番号 161 振替 東京 9-187408 電話 (03) 953-3301 (代表)

乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。

© 小島三郎 1982

本書の内容の一部又は全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者及び出版社の権利侵害となりますので、コピーの必要がある場合は、予め当社にて許諾を求めて下さい。

は し が き

本書は、1972年から1978年までに経済学研究誌（WiSt）において発表された科学理論的論文を抜粋したものである。本書の属するシリーズは、この雑誌に寄稿された論文をテーマ別に集成し、それによってそれぞれのテーマに関心を持つ読者に対し便宜をはかるといふ、出版社の企画によるものである。

本書に収められている諸論文は、中には新たに書き下ろされたものもあるが、科学理論の中心問題を叙述するとともに、擁護するものである。これらの論文は、中にはかなり論争的となっているものもあるが、科学理論における基本問題の鳥瞰図を与えるとともに、近年経済諸科学、特に経営経済学における科学理論的論議にみられる基本的傾向を反映している。

科学理論的考察が経営経済学ないし経済諸科学に対して持つ意義は、このような論義をとおしてますます明らかになっている。それゆえ、これらの学科においても、科学理論の知識は、基本的な知識として不可欠である。

本書の目標は、その基本的知識を紹介するとともに深化し、科学理論の問題への関心を強めることにある。この目標はもちろん、現在の論争を紹介することによっても果たされるが、加えて、新たに書き下ろされた論文により、係争中の科学理論的諸問題が引き続き解明されよう。

したがって本書はさしあたり、科学理論の多くの入門書に見られる基本的知識をすでに持っている読者を対象としている。しかしまた本書は、科学理論的な基本知識を持たずに、特定の科学理論的基本問題にかんする情報をえようとしている人々、そして論争的となっている諸見解が入りみだれる中で第一歩を模索している人々にも役立つであろう。

1979年1月マンハイムにて

ハンス ラフェー

ホド アベル

訳 者 序 文

本書は本来1979年に公刊されたが、当時私は本書の出版に気がつかず、したがって私が本書の存在を知ったのは編著者であるH・ラフェー教授とB・アベル博士が私に献本してくれた1980年の春のことであった。

私達の研究グループは、何か新しい著作が公刊されたとき、適当と思われたものは研究グループの研究会で紹介し、そして特に興味のもてるものについては関心のある個人または全員がさらに検討を加えるのが常である。そこで本書は私によって早速簡単な内容の紹介が行われたのであった。

私のまわりに集まっている研究グループは、科学哲学、社会科学方法論、経営学・会計学・マーケティング方法論、経営学・会計学・マーケティング学説の研究に従事している研究者グループである。したがって、個々の専門研究分野は正確にはそれぞれ異なるが、私達は長い間現代科学哲学の研究を共通問題として取扱ってきた。そして、この私達の研究グループにとって最大の問題点は、正に現代科学哲学と個々の社会科学との架橋の問題であり、またそれぞれの社会諸科学の科学性をめぐる方法論的諸問題であった。

しかもこの問題は、周知のとおり、現代の科学界全体の大問題であり、そのために単に科学哲学のみならず実に多くの個別諸科学の専門家の重大関心事なのである。たとえば、1つの例として、いま西ドイツにおける経営経済学の分野に目を向けてみると、そこでは1960年代後半以降科学哲学の強い影響のもとに経営経済学方法論をめぐる激しい意見の対立が生まれ、いわゆる第4次方法論争が展開され、大別して5つの学派が相争っているほどである。

そこで、私が研究グループの研究会で本書を紹介したとき、グループの諸君は本書に非常に強い関心を示したのであった。何故なら本書は正に科学哲学と社会諸科学との架橋の問題をとりあげた論文と、また社会科学の方法論をめぐる際立って対立する見解の諸論文がそれぞれ収録され、上手に編集されていたからである。それゆえ本書は、研究グループの諸君によりただちに日本語に翻

訳されることになったのであった。

したがって、本書は、少なくとも読者に対し2つの意義をもっていると考え
る。すなわち、その1つは、科学哲学ないし科学理論——ここでは特に批判的
合理主義と構成主義哲学——の個別社会科学——ここでは経済学と経営経済学
——へ架橋とその実践に関してであり、第2は今日における経済学および経営
経済学の方法論的対立をみごとに描きだしているという点である。

さて、本書は以上のような性格と内容と意図とをもっているので、私達はそ
の翻訳にあたって何よりも(1)原典の脚注と参考文献はこれを忠実に転載するこ
ととし、またそれ以外に(2)私達の手で事項索引と人名索引を付け加えた。そし
て特に、この索引項目は、経済学、経営経済学および科学哲学のいずれかに精
通している読者が、どちらからもアプローチできるように配慮して作成されて
いる。私達は、これらにより読者の方々がよりいっそうの研究の足掛りをうる
ことができると考えている。

また本書は、本来論文集であるので、私達の研究グループのメンバーでそれ
ぞれ訳出論文の分担を決め、素訳を行った後に相集まって訳語および文体の統
一をはかり、ときには内容にもどって論議を重ねたので、ドイツ語文献の翻訳
書としては従来になく平易な文章になったと思っている。

なお、最後に原著の編著者について簡単に紹介すると、H・ラフェー教授
は、1929年生まれの現在53歳であり、1969年以来マンハイム大学正教授で、科
学理論、マーケティング論、企業政策論、会計学の専門家として活躍しておら
れる。そのもっとも著名な著作は、科学理論の問題に100頁余の頁数をさいた
1974年の「経営経済学の基本問題」(Grundprobleme der Betriebswirtschaftslehre,
Göttingen 1974)である。他方、B・アベル博士は、マンハイム大学H・ラフ
ェー教授のもとで助手をつとめ、「経営経済学における説明の基礎原理」
(Grundlagen der Erklärung in der Betriebswirtschaftslehre, Bamberg 1981)で博
士号を取得した1948年生まれで現在34歳の新進気鋭の経営経済学方法論の研究
者である。

いずれにしても私達は、本書は単に経済学、経営経済学に関心をもつ人々ば

かりではなく、広く科学あるいは社会科学というものの基本的性格に興味をもつ人々に対し、今日の科学哲学と社会科学の現状認識の上できわめて有益な示唆を与えてくれるものと信ずる。

1982年10月

監 訳 者

小 島 三 郎

翻 訳 分 担 (※は編集幹事)

はしがき

I : 1 小 島 三 郎 (慶応義塾大学教授)

II : 1 樫 原 正 勝 (慶応義塾大学助教授)

2 富 塚 嘉 一 (中央大学助手) ※

3 丹 沢 安 治 (専修大学専任講師) ※

III : 1 海 野 潔 (国学院大学助教授)

2 堀越比呂志 (慶応義塾大学大学院)

3 大 平 浩 二 (明治学院大学専任講師)

4 堀 田 一 善 (慶応義塾大学助教授)

IV : 1 豊 田 哲 山 (慶応義塾大学大学院)

V : 1 菊 沢 研 宗 (慶応義塾大学大学院)

2 菊 沢 研 宗

3 丹 沢 安 治

VI : 1 榊 原 研 互 (慶応義塾大学助手) ※

目 次

は し が き
訳 者 序 文

I 序

経済諸科学における科学理論の課題と

現時点での諸傾向	1
1. 科学理論的省察の対象と課題	1
2. 構成主義 対 批判的合理主義 ——二つの科学理論的基本構想のメルクマール	2
3. 本書の構成	7

II 批判的合理主義と経済諸科学

古典的認識論と現代科学理論

1. 今日の科学プログラムをチェックする基準としての 古典的認識論	10
2. 古典的認識論の主潮流	11
2.1 古典的合理主義	11
2.2 古典的経験主義	13
3. 基礎哲学としての古典的認識論	15
3.1 真理の啓示理論	15
3.2 古典的方法論の根拠付け公準	15
4. 古典的認識論への科学理論的批判	16
4.1 絶対的根拠付けから帰結するミュンヒハウゼンのトリレンマ ...	16

4.2 絶対的根拠付け思考から考えられる帰結	18
4.2.1 認識論的にもっともすぐれた言明のドグマ化.....	18
4.2.2 理論的一元論.....	19
4.2.3 誤りのイデオロギー化.....	19
4.3 古典的認識論に固有の難点	20
4.3.1 合理主義における理性の過大評価.....	20
4.3.2 経験主義にみる経験の過大評価.....	21
5. 古典的認識論の部分的シンテーゼとしての今日の科学観.....	23

批判的合理主義の方法論26

1. 経済学における認識論的問題状況の錯綜性	26
2. 経験主義と約束主義との間に：批判的合理主義の純粹理論.....	27
2.1 ヒュームの問題：批判的合理主義の具体的展開	27
2.2 反証論の方法論的規則体系	30
2.2.1 一般的規則および受容規則ないし境界設定規則.....	30
2.2.2 操作的規則.....	33
2.2.3 許容できる回避戦略と許容できない回避戦略.....	35
2.2.4 修正条項.....	35
2.2.5 新しい優先性規則.....	36
2.2.6 ポスト反証規則.....	38

反証論と経済理論：批判的合理主義の適用問題42

1. 反証論を適用するさいの不当で問題のある手続き	42
1.1 理論の内容と体系的性質	43
1.2 約 束	43
1.3 基 本 仮 定	45
2. 経済学における理論の進歩と経験	48
3. 理論・モデル・実在	49
3.1 仮説と経験内容	49

3.2 仮説とモデル	50
3.3 実証主義とモデルプラトニズムス	53
4. 推 奨	54

Ⅲ 経済諸科学におけるモデルと理論

経済学におけるモデル概念と理論概念	57
序論と概要	57
1. 技術，自然科学，数学のモデル概念	59
1.1 技術のモデル概念	59
1.2 自然科学のモデル概念	59
1.3 数学のモデル概念	60
2. 経済学におけるモデル	61
2.1 経済モデル＝経済的現実（断面）を単純化した模写	62
2.2 言葉によるモデル描写	63
2.3 グラフによるモデル描写	65
2.4 分析的モデル描写	68
2.5 仮定体系によるモデル描写	70
3. 仮 定 体 系	71
3.1 仮定体系の設定，帰納法	72
3.2 仮定の実在との関係とその情報内容	74
3.3 仮説の真ないし検証度	75
4. 科学，とくに経済学の理論概念	76
4.1 演 繹 法	76
4.2 仮定体系の独立性	78
4.3 仮定体系ないし理論の無矛盾性	78
4.4 経済学における理論概念	80
5. モデル形成と理論形成の目的，モデルと理論の種類	82

5.1 記 述	82
5.2 調 査	83
5.3 説明ないし根拠付け	85
5.4 予 測	87
5.5 意思決定	89
5.6 政治的立場の正当化	91
6. モデル（理論）のコントロールと修正	91
6.1 説明的経済理論のコントロールと修正	92
6.2 ケースバイケースに適切なモデルの応用可能性の コントロール.....	94
結 論	96

経営経済学の行動科学的基礎付け99

1. 序 論.....	99
2. 行動諸科学の、管理論および経営経済学への導入	99
2.1 行動諸科学とアングロサクソンの管理論	99
2.2 行動諸科学とドイツ語圏の経営経済学	101
2.3 科学戦略の定式化	103
3. 行動科学的研究と諸手法の検討	106
3.1 手法の開発における必要条件の定式化と行動科学的研究	106
3.2 手法の開発に対する行動科学的研究の意義	109
3.3 手法を評価するさいの行動科学的研究	110

経営経済学とその社会科学上の隣接諸学科：

統合問題	113
------------	-----

1. 社会科学とは何か，対象と目標設定	113
2. 社会科学における細分化傾向：原因分析	116

2.1 領域に特有（と思われる）概念用具の創作	116
2.2 領域に特有な人間像の構成	117
2.3 理論なき経験主義	119
3. 統合プログラム：理論的基礎に基づく統一化	120
4. 社会的事態としての稀少性：統合原理	121
4.1 稀少性という事態の伝統的な見方： 境界設定について広く受け入れられた論証の概略	122
4.2 効用主義は死んだのか——あるいは生き残れるのか：社会 科学的認識プログラムとしての修正された経済的アプローチ	123
4.3 結論：特殊な社会科学としての経営経済学	125

経済諸科学の指導理念としての理論的モデル思考 128

1. 批判的合理主義における認識進歩の理念	128
2. 経済諸科学における非理論志向的思考	131
3. 経済諸科学の課題としての理論的モデル思考	134
4. 理論的モデル思考と非理論的思考	144

Ⅳ いくつかの代表的な経営経済学的 構想の科学理論的側面

経営経済学の科学理論的基礎 151

1. 一般的な科学理論的基礎	151
1.1 科学と科学理論	151
1.2 实在科学的思考の根本問題	154
2. 経営経済学に固有の科学理論的基本問題	157
2.1 経営経済学の発見の脈絡について	158
2.1.1 「要素理論的」アプローチ	159
2.1.2 システム論的アプローチ	160

2.1.3 意思決定論的アプローチ	162
2.2 経営経済学における根拠付けの脈絡について	163
2.2.1 批判的合理主義	164
2.2.2 経営経済学の行動理論的科学構想へのアプローチ	166
2.2.3 行動志向的経営経済学における研究プロセス	168
2.3 経営経済学の応用の脈絡	173

V 構成主義と価値自由原理批判

経営経済学における価値自由原理について	178
1. 経営経済学における価値自由原理	178
1.1 価値自由原理の内容	178
1.2 価値自由原理の経営経済学に関する諸帰結	179
1.2.1 実践把握の制約	179
1.2.2 経営経済学の信条的基礎付け	180
2. 価値自由原理批判について	181
2.1 根底にある科学観	181
2.2 真理の対応理論批判について	181
2.3 「批判的テスト」という方法の批判について	183
3. 構成主義的代替案のプログラムのアプローチ	186
構成主義の諸原理	191
超主観性原理	195

VI 構成主義批判

批判的合理主義と価値自由原理	200
1. 規範の領域における批判的合理主義の基本理念の肥沃さ	201
2. 批判的合理主義と価値自由原理	205

3. 価値自由科学の肥沃さ	213
---------------------	-----

事項索引.....	221
-----------	-----

人名索引.....	226
-----------	-----

I 序

経済諸科学における科学理論の課題と現時点での諸傾向

ハンス・ラフエー／ボド・アベル

1. 科学理論的省察の対象と課題

科学理論の対象は、個別諸科学であり、経済諸科学もそのうちに属している。科学理論は、それら諸科学の目標、言明（言明体系）および基礎的処理方法（手法）についての言明をもたらすものである。そしてこれとともに科学理論は、科学の実践を明らかにし、科学、すなわち科学的問題解決行動およびその成果が満たすべき諸要請のカタログを展開し、結局のところそれが単なる日常知識以上のものであるという要求をかかげようとしているのである。この要請は、単に科学的言明と非科学的言明との間を境界付ける企てに基礎を提供するだけではなく、同時に指導原理という形に結晶する方向付けの枠組（Orientierungsrahmen）を提供するとともに、その限りで科学的問題解決行動のための発見的方法（Heuristik）を提供するものである。そして、そのつど選択される方向付けの枠組いかんで、時にまったく異なった問題が科学にとって重要であるとみなされることがあり、またこれらの問題は、さまざまに解釈され、また批判的に明らかにされ、そして科学はそれが取扱う問題の克服にいかに関与すべきかということについてさまざまな見解の生まれる可能性を持っているのである。

したがって、科学理論の省察は二つの課題をもっている。第一に科学実践を批判的に明らかにし、その実践の際に現われる多くの困難に注意を向けさせるということであり（批判機能）、第二にそのつど実施される科学実践に対し、代替案たりうるできるだけ体系的につくりあげられた構想（パラダイム）を展開することである。しかもその代替案というものは、厳密にいうならば、指摘された困難な諸事象をよりよく克服することを約束し、そのかぎりにより有効なも

のとみなされうるのである（発見的機能）。

この二つの機能を出発点として、科学理論にとっては、新しい科学的構想と、科学実践において現に存在する伝統的な諸指針との間の批判・創造的緊張関係を生み出すことが基本的な課題なのである。そしてこの際、その批判・創造的緊張関係は問題の解決という点でより強い代替案への前進という意味において科学的進歩の重要な刺激とみなされうるのである。このような進歩は、諸科学の原則的にすべての発展段階においてありうるとみなされるので、進歩の刺激は科学理論的省察の、永久で決して終わることのない課題であり、この課題はある科学の危機的現象（Krisenerscheinungen）が既に明らかになった時のみ解決すべきだということにとどまるものではない。したがって、経営経済学におけるように、毎年のコロキウムをもつ科学理論の研究集団の制度化といったものは非常に多いものといえよう。

さて、科学理論的議論において留意すべきことは、批判・創造的緊張を生み出すような科学構想が、科学実践に対して、何らかの方法でアプリオリに特徴づけられた地位を決して誇れないということである。科学理論は、専門諸科学の連邦的な体系といったものに関する侵すべからざる「中心機関」（Zentralorgan）として理解されてはならないし、また科学理論家は決して己れを体制擁護者であると考えてもいけない。科学理論的考察において展開される構想は——すべてのものと同様に——批判を受け入れる草案とみなされるべきであり、その場合それらは検証されるべきであり、また場合によっては破滅しうるものなのである。また、代替案という見地からの批判、すなわち代替的な科学構想をかんがみた上での批判もこのような批判の一つであるが、それらの構想についても本書でさらに若干の批判が示されるはずである。

2. 構成主義 対 批判的合理主義——二つの科学理論的基本構想のメルクマール

科学理論的省察というものが永遠に汲み尽せない課題であり、科学理論的構想が議論の余地のない程確実な草案を表わすものではないということは、まさ